姫路市立美術館
研究紀要

第11号 ▪ 2010年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

姫路市立美術館

姫路市立美術館
研究紀要

第11号 ▪ 2010年

B U L L E T I N

O F

H I M E J I

C I T Y

M U S E U M

O F

A R T

目　次

白瀧幾之助　文献再録
平瀬　礼太
…… 1～15

『大日本魚類画集』の「解説」の再録
田島　奈都子
…… 17～67

白瀧幾之助　文献再録

平　瀬　礼　太

姫路市立美術館では2010年9月11日より10月31日まで「没後50年　白瀧幾之助展」を開催した。タイトル通り作家の没後50年を記念する展覧会であるが、白瀧が兵庫県生野町（現朝来市生野町）出身であることから、当館でも開館当初より白瀧の作品を同町出身洋画家の和田三造、青山熊治の作品とともに収蔵対象としてきた。今回の展覧会では当館所蔵品はもちろんのこと、代表作「稽古」や「さらひ」など明治期の作品から、1904年～10年の留学時代以降の水彩画、「羽衣」「浴後」などの意欲作に加えて、「ハリス氏の像」をはじめとする肖像画まで様々な白瀧の作品を展観した。展覧会図録にはそれらの作品を紹介するとともに、白瀧幾之助がその創作（水彩画、肖像画など）について記した文章や、留学時代の思い出を認めた文章を再録しているが、ここでは図録には掲載することのできなかった関連文献を、白瀧の自筆文献を中心に再録した。そこには自作に関するコメントや、藤島武二、黒田清輝、山本芳翠、南薫造、湯浅一郎、青山熊治など白瀧が親しく交わった師や友人、後輩に関する文章もある。展覧会では富本憲吉や高村光太郎、南などとの留学時代における親しくも楽しい交友関係を紹介したが、この文献再録からも白瀧と他の作家たちの交流や白瀧の人柄がうかがわれる。

１．白瀧幾之助「記憶の二三」

ヴェニスのチントレットは有名なものですが、私はチントレットの絵には、余り感心して居なかつたので、それよりもアカデミーにあるカルパッチオの絵を見たいと思つて居たのと、タアナアの絵で、多年ヴェニスの風景を想像して居たのでしたが、タアナアは余程理想化して居たものと見えて、往つて見てはそれほどには感じませんでした。カルパッチオも、余り前からの期待が大き過ぎた為か、左程にも思ひませんでした。

何分僅かに二日ばかり滞在したのみですから、深い印象は受けませんでした。私の往つたのは六月頃でした。随分暑いことでした。

タアナアの絵で見ると、堀割などは大分広さうに思はれますが、実際は甚だ狭いのです、グランドカナルと云つても、余り広くはないのです。

夜の景色は両国あたりの夜景の様に、幾つも、幾つもの燈火が、チラチラと水に映つたレフレクシヨンが、定めて綺麗であらうと思つて居たので晩食後に街へ出て、船を傭うて廻つて見たが、一向それもなく、只所々に一つ二つ燈が見える位のもので、極めて寂寞たるものでしたから、直ぐ宿へ帰りました。何時か私の想像して居た様な、そんな景色の見られる時もあるのかも知れませんが、私はそれを見れませんでした。

最も眼に付いたのは、女が皆シヨールを掛けてシヤナリシヤナリと歩いて居る風が面白いと思ひました。前に日本でも流行つたことのある様なシヨールで、下の方に総の様なものゝブラ下つたので、それを長く裾の方まで下げて、はをつて、胸の処でかき合せて居る。色は大抵一様で、皆黒ずんだ色合のです、下流の婦人は下に粗末な着物を着て上に必ずシヨールをはをつて居る。上流の婦人は下に絹などの着物を着て居て、シヨールも薄手のを掛けて居ました。

最も面白く感じたのはサン・マルコ寺院内のモザイクでした、天井と云はず、壁と云はず、地盤は勿論ベタ一面のモザイクで、基督或は聖徒の事績など様々ありまして、其内円い天井には創世紀のコムポジシヨンがあります、恰もモザイクの展覧会を観るやうな感じがありました。モザイクを研究する人は見逃すべからざるものです、誠に面白いもので、今も記憶に残つて居ます。

丁度万国美術展覧会が開催中で、英国で見たことのある英国の絵なども出て居ました。
それから宿で食事の時に、蛸のフライを付けられて驚きした、欧羅巴でも米国でも、蛸を嫌ふので、嘗て食卓に上つたことはなつたのに、此処で初めて蛸を付けられて驚いた、其事は、今も記憶に残つて居ます。（談）
（『美術新報』11巻1号　1912年8月）

２．「肖像画の妙味」
後期印象派の作品が持て囃されて居る洋画界に私の様なものが古くさい黒つぽい肖像画を捉げて文展の檜舞台に立つと云ふのは自分ながら気の強いのに驚く位です。入選したのさへ光栄と思つて居りましたのが二等賞の主席にならうとは全く夢の如うです。授賞された画は横浜サムライ商会の主人野村洋三氏の肖像画で去年半歳ばかりの間に出来た作です。私は但馬生野の生れで明治二十三年に初めて洋画界の人となりました、其後渡米の砌彼地で有名な肖像画家ロバート、ボナール夫妻の門に入つて初めて肖像画に対する私の眼が開きましたそして肖像画には他に見られない苦心と面白味があるのを知りました。私は今年四十二で御座います（白瀧幾之助氏談）
（『東京朝日新聞』1914年10月25日）

※第8回文展出品の「野村氏の像」についての白瀧のコメント。

３．白瀧幾之助「秋の写生地」
秋の写生地に就ては別段感想といふ程の事もないが数十年前摂津箕面の紅葉を写しに行つたことがあつた十八丁の間の谷が紅葉で実に奇麗である其間にシヤレタ料亭抔もあるが其処に龍安寺といふ古刹があつて加減のよい精進料理を出して呉れる僕は寺僧に乞ふて茶室に泊て貰ふ事にして一秋を暮して昼間は京神間の看楓客がひきも切らぬのでうるさいが朝の内は静で瀧の辺に猿の群が下りて遊で居る夜の静かさは格別で谷川の水の音計り寧ろすごい位である腹のそこから静寂は味はれた其瀧から又十八丁上ると勝尾寺といふ三十三所の札所がある之の間の景色も中々わるくないと思つた近来大に俗化したが併し谷の奥には其頃の香が残つてゐる、先年塩原へ行つて見たが之は又箕面抔比較にならぬ大きな渓で従て画く場所も広い紅葉では先づ日本一だらうと思はれる位である此両所とも余りに著名で却て普通になつて居る却て秩父の紅葉が面白いだらうと思はれる。
（『みづゑ』117号　1914年11月）

４．藤島武二「文展の西洋画」
白瀧幾之助氏の「某氏の肖像」「収穫」「撫子」三点の内、「某氏の肖像」の方比較的優つて居る。同氏の作品に就いて何時も感ずる事は、題材の選択が余り多方面で殆んど其の嚮ふ所を捕捉し難い所にある。それが同氏の長所であり、兼ねてまた短所でもある。其実例は本年度文展出品の三点に徴しても明かである。三点三様に描き別けた所は、氏の才気の然らしむる所であらうが、一貫したる本領の明かでないのは惜むべきである。
「撫子」と題するタンペラは予の見たる所ではビエレーの手法を偲ばせる作風である。成るべく陰影をはぶいて、細部に亘つて物質を表現しやうとする企てであるらしい。其結果は却つて主要の人物のデツサンの欠点を明かならしめ、且つ情緒の表現を鈍くせる感がある。斯るアンチームの題目は、マリー・カサツト女史若しくはカリエール等の得意とする所、其作風を参照すれば思ひ半ばに過ぎるであらう。
「収穫」はまたミレーの画を思ひ出させずにはおかない。構図とか、明暗の按排とか、約束通り

出来て居るが、ミレーの画にありて此画に欠けたる点は、技工上の妙処、彩料の扱ひ方、特に純朴なる農民生活に対する熱烈なる同情である。

「某氏の肖像」は又純然たる英国アカデミー風の画である。氏の得意とする所も或は此辺ではあるまいか。兎も角肖像画家として有数の人たることは確である。

（『中央美術』2号　1915年11月）

※藤島武二による白瀧の第9回文展出品作品に対するコメント。

５．白瀧幾之助「新文展審査委員評　南薫造氏」

美校時代の南君は全く知らない。私が始めて南君を知つたのは英京ロンドンであつた。慥か千九百九年頃だと記憶する。南君と二人でこのロンドンの或る画室で一年程も自炊生活をやつた。その時始めて南君と云ふ人を知つたのである。私の見た南君は至極穏健な性格の人であつた。ごく円満な温和しい人で、例へば少々位不愉快な日でも南君と一緒に居れば忘れて終ふと云ふ程円満な穏やかな人である。それに学問もみつしりあつて、年から云へば私の方がずつと年輩だが、なんとなく先輩の様な気がして居た。

南君は趣味にも富んで、音楽の嗜みも可なり深い様であつた。私が音楽好になつたのも一にロンドン時代、この南君や高村君などの感化のお蔭である。その上南君は文才があり、文学の嗜みも中々深い。

そして南君に就いて一等感心するのは、美術家を気取らぬことである。世間にはよく美術家気取りをしたがるものがある。いくらか画筆に親しむともう立派な美術家になつた積りになつて、所謂「美術家」と云ふ異様な風体をして見たり、無頓着をてらつたり、放胆を喜んだりするものである。が南君はさう云ふ風は寸毫もない。真面目な常に紳士的の態度を忘れない人で服装などもごく普通のものを用ひて、ちつとも美術家を匂はせない人である。

又南君は絵画ばかりでなく、各種の美術工芸品、図案などにも造詣が深い。彼方に一緒に居た時分も、絵の学校に通つて居る傍ら、常に美術館へ入つて印度やペルシヤ、埃及などの古代芸術を調べて居た。斯様に南君は新しいものばかりでなく、古い原始的のものにも公平に眼を通して居るし、それに前にも云ふ様に音楽文学などにも相当の智識があり特に性格は穏健な紳士的な人であるから、文展審査員には最も好適の人と思ふ。其意味で今回の新任は穏当な処置と信ずる。前にも云ふ様なわけで南君は可なり長く英国に居たが、しかし同君は英国は余り好いて居なかつた様である。強ひて同君の好きな画家を挙げればまづバンジヨンスなどであらう。南君はこの人の絵を摸写したこともある。一体どちらかと云ふと南君はデコラチーブなものが好きで、そんな事からシヤワンヌ等を好いて居る。尤もこれは私の想像で、或は間違つて居るかも知れぬ。

（『中央美術』2巻9号　1916年9月）

６．白瀧幾之助「残る記憶を辿つて」

欧米の美術館を歴訪したのも彼之十年前の事で、大半記憶も失せて仕舞つたが、残る記憶を辿つて御話すれば、

先づ各国の優秀の作品を網羅し、内容の豊富なる点に於ては、何と云つても仏国ルーヴル美術館が世界第一と云はなければなるまい。併し余りに宏大に過るのと、建物が元と王宮であつたのを、美術館としたのであるから、光線の具合や陳列の雑然たる事に於て、聊か遺憾に思はれた。列品の内で今も尚忘れられないものは多くあるが、其内でも埃及彫刻の書記生の坐像や、ペルシヤの煉瓦の獅子だの、絵画に於てはボツチセリの壁画や、有名なヴンチのモナリザ。ジヨルヂジオネの春抔

は他国で見られない神品であらう、下つてワツトー、アングル、ドラクロワの諸作も他では見られないものである。

近代の作品を蒐めたるルユキサンブル美術館は、余りに狭隘に過ぎて折角各国の代表作を蒐めながら、残りなく見る事の出来ないのは残念な事であつた、列品は何れも親しみのあるもの計りであるが、殊にロダンの諸作やシヤワ゛ンヌのデッサン杯は忘れられないものである。

プチパレーは近古のものを蒐めたる誠に手頃の美術館で、中にもエンネルの一室は他国では見られないものである、此建物は一九〇〇年の博覧会の遺物であるとか、頗る結構なものであるが、聊か威厳に乏しい様な感じもした。

英国の美術館は、彫刻はブリテツシ、ユミユゼアム、絵画はナシヨナルギヤレリー、新代のものはテートギヤレリー、工芸品はサウスケレシントンミユゼアム、印度のものはインヂアンミユゼアムと、各区別してあつて、内容と建物がよく一致して居るのみならず、陳列が組式的に整然としてあるから見よいのみならず、一見して変遷の具合迄わかる。

ブリテツシユミユゼアムの古彫刻は何れも優秀なるものであるが、之に依つて埃及の文字を解せられたといふレセツタストーンは世界の珍なるものであらう、其他アツシリヤの獅子狩の宿のレリーフだの、希臘のパルテノンの破風の群像抔は全く天下の神品であつて、他の美術館では見られないものである。

ナシヨナルギヤレリー所蔵のレムブラントとホルバインの諸作は、他の美術館に比して数多く逸品が蒐められてゐる。ボツチセリーのマドンナ。フランチエスカの耶蘇洗礼の図は忘れ得られないものである、ターナー、コンステーブルのものは流石に本国のものとて此館に多く蔵せられ、ミケルアンゼロの二枚のパネルの絵は、恐らく世界に類のないものであらう。

テートギヤレリーは英国現代のもの多く、ワツツの一室、プレラフワイライトの諸作が見るべきものである。

此館は初めテート氏の寄附に係るものである。それに政府が年々画を購入して段々に増して行くのである、建物の建方も初め大きく設計して置いて一部分殖やして行くといふ仕組である、日本にも百年計画といふ風にして金の集るに随つて、追々増築して遂に立派なのに完成する様にしたいものである。

サウスケンシントンミユゼアムの工芸品は何れも珍品のみであるが、殊にペルシヤ、支那の陶器には垂涎措く能はざるものがある、タピストの下画に描いたといふラフアエルのカルトンは、其高雅な色彩や偉大さに於て他の油絵で見られない感じを得た。

バーミンガムミユゼアムはバンジヨンスの出生地とて、彼の遺稿が多く集まつてある、ロゼチーの鉛筆画の遺稿と対照して見る事の出来るのは一寸面白く思はれた、其他バンジヨンスのピグマリオン、アルバートムーアのドリーム等は此館の白眉とする処である。

其より仏国田舎の美術館ではルアン、アミアン、リオンの各美術館ではシヤワ゛ンヌの壁画に感涙し、リールのミユゼアムでミレーのネストリングスとクールベーの風景画を掘り出し、ブラツセルでは、おなじみのウヰツマンの作品にお目に懸り、ムニエー一室で彫刻の力強さを泌々と感じた事であつた。

和蘭ヘーグではホルバインの鷹使ひ、レムブラントの兄弟の肖像、琴を聞くダビツド。ハーレムではモーブの羊、ハルスの老婦人の群像。官人集合の図等、及アムステルダムでは名物のナイトウオツチ、呉服商人の群像等は忘れられないものゝ一である。

此アムステルダム美術館に、入口正面の室にはアンチツクが陳列してあつて、左右両翼の館に右は古代、左は近代と区別して、階上は絵画階下に彫刻といふ風に陳列してあつたので、旅行者抔にも誠に見よい列べ方であつた、此館は英仏にある如き堂々たる石造では無く、たしか煉瓦交りの建

物であつたと思ふ、それ位な程度のものならば、日本でも建られない事はあるまいと一寸羨しく思つた事であつた。

伊国フロレンスの各美術館の古画は枚挙に暇あらずだが、彼のウヒツチやプチパレーに有るマドンナやマドレンを見て其神々しさに打たれ誠にラフアエルなるかなと感嘆して仕舞つた。アカデミヤ美術館にあるボツチセリの春の画は、他の作と一種違つた描方で、黒つぽいトーンであつた。此館にあるミケルアンゼルの数個の半成の大理石彫刻は実に偉大の力の籠つたもので、其味はとても他の完成品では見られないものである。

ミユゼサンマルコのアンゼリコの僧房各室の壁画は他のパネル等に描てある鮮麗なものとは違つて、材料の結果か其温雅の色彩は実にたまらぬものである。之とヴアチカンのミケランゼルの天井の壁画の色彩は全く伊太利へ行かなければ味はゝれぬものであらう。

ミユゼラルメのアフロデイテの石彫は見逃すべからざるものである。

ナポリの美術館ではポンペイ時代からの緑青色から群青色になつてゐる結構なブロンズ物が豊富に並べてあつて、彼のヴヰトレピサノのメダイユ抔も、此館に残されてあつた。

此他美術館の列品に就ては話す事は際限が無いが、又後日の機会に譲りましやう。

（『美術』1巻11号　1917年9月）

７.「初めて特選に入つた人々　播州の殿様を　推薦　白瀧幾之助氏」

今度出品した某氏の肖像といふのは実は母がつかえて居た播州の殿様ですが不図した転機から世を捨てゝ仏門に入つた人です、先ごろ越後に行くとて私の許に寄つた際記念の為めに■きました七十余歳の身でいかにも殿様らしい気品と浮世の辛苦を嘗めた深酷な味ひがあつて画題として非常によいので出品したのです、私は五六度入選し第八回には二等賞を得ました、私は絵画に対して非常に苦しみ悶えて居ります、私の画が今後いかに変化するか自ら迷うて居ります。

（『東京朝日新聞』1918年10月23日）

※第12回文展に推薦出品した「某師の像」についての文章。8も同様。

８.「人格の光を出すのに　『某師の肖像』の作家　白瀧幾之助氏談」

『某師の肖像』は私の母が仕へた旧藩主で仔細あつて出家し池上の本門寺に入つた人の肖像である、その後田舎に行きこの夏越後から旅行の途次に上京して私の宅に立寄つて下さつた、私が画家であるために肖像を書いて呉れとのことで七月上旬に一週間程カンバスの前に立つてもらつた、師は内面的に苦しまれた人格の輝のある人だけに其品位を出す為には非常な苦心をしました、本人に似せなければならないために可なり苦心した、会心の作と言ふのではないが私には懐しみの深い作である」

（『読売新聞』1918年10月24日）

９．藤島武二「白瀧幾之助氏」

白瀧氏の芸術家的生活は既に随分長いものである。何年頃のことか判然記憶せぬが、氏は初め山本芳翠先生の研究所で私共と一緒に学び、その中、私は二三年地方へ行つてゐたので詳しいことは判らないが、山本先生に引きつゞいて黒田氏の教へを受け更に美術学校に洋画科が設けられると同時に入学して、又黒田氏に就いたのである。其当時は黒田氏が仏蘭西から齎らした印象派の影響を受けて専ら研究して居られたやうである。

其後、学校を出てから、亜米利加に行きアカデミーか何かに入つて研究された。其当時の芸術は

亜米利加風の感化を受けられたことゝ思ふ。それから更に英国に渡りしばらく其処に滞在された。英国の画風と亜米利加の芸術には余程共通したところがあるので、その頃の白瀧氏の画風は、大分日本に居られた頃とは傾向が変つてゐた。それから更に仏蘭西に渡り、長くはなかつたがしばらく滞在された。元々氏は山本先生はじめ黒田氏の教へを受けて、実は仏蘭西風の芸術で出来てゐたので、仏蘭西に行かれてから、彼地の芸術に対しても興味を感ぜられたことゝ思ふ。

氏の芸術は、私等の見るところでは、仏蘭西風の芸術に英国風の芸術が多少混つて居るものと見られる。併し多年芸術にたづさはつて居る為めに、白瀧氏の芸術はもう本当に白瀧氏のものとなつて居る。氏の人物に接する感じと氏の作品に対する感じとが、よく一致するやうになつて居る。氏は非常に温厚篤実な人で、奇を衒つたりするやうな風はない。氏の芸術にもさういふ点がよく現はれてゐる。新奇なものとか奇抜なものとかいふ風なものは氏の作には少ない。要するに天才的の閃めきは薄いが、何処までも着実で、危な気のない処に充分その価値が認められる。

殊に肖像画に於ては、亜米利加でその途の専門家に就いて学ばれたと聞くが、総て肖像画家の備へるべき条件、資格が備はつて居る、現代に有数な肖像画家といふことが出来ると思ふ。他に風景、静物も、極めておとなしい、いや味のないものを描かれるやうである。

（『中央美術』4巻11号　1918年11月）

10. 白瀧幾之助「鑑別所感」

鑑別の方法は、自分がこれ迄想像してゐた程度よりは非常に丁寧に行ふものであるといふことを、今度初めて帝展の鑑別に預かつて知つた。全体の出品数を毎日再三再四丁寧に反復して見て選り挙るわけであるから、これで入選に洩れたものは致し方がないと諦める外はないといふ事を感じた。これ迄は鑑別の方法等について多少疑惑を抱いてゐたこともあつたが実際に当つて見てその結果のどうする事も出来ないのを初めて感じた。これ迄のことは知らないが今年は余り飛びはなれて注意を惹くやうな作品は出なかつたので格別取り立てゝ云ふ程の感想もない。

水絵は油絵と同時に見る。尤も作品は分けて見るか、いつも水彩画展覧会等で見る時よりも面白みが足りぬやうに思ふ。

兎も角、出品の各個については余程注意して見るが一時に多数の出品を見るのであるから、どうしても印象の強いものが得をする場合が多いと思ふ。この画は展覧会場では目立つが室内にあつてはどうか等と注意もして見るが、結局印象の深いものの方が注意を多く惹くわけである。只画室の中で自分の画を見てゐる時には相当に見えても、多数の作品の中に這入ると印象が弱められるもので、従つて印象の強い充実した作品でないと、可成りの出来のものでも入選は出来ない。それ等を万遍なく入選させるには数の制限が許さないのである。この印象といふことは決して流派等には関係しないのである。一例挙げて見れば富田温一郎君の肖像の如き旧派に属した地味な作品であるがその充実さは随分強い注意を惹く。（談）

（『みづゑ』189号　1920年11月）

※第1回帝国美術院美術展覧会（帝展）で審査員を務めた白瀧の鑑別所感。11も同様。同展で白瀧は「芍薬」「コンデル博士の像」を出品した。

11. 白瀧幾之助「鑑査の所感　裸体画に註文」

私は帝展の鑑別に就て文部省から、斯う云ふ方針によつて鑑別をやつて貰ひ度いと云ふ様な通達があるだらうと思つて居たが、別にさう云ふ事もない処から見ると、審査員各自の方針に委せられるものと思はれるので、私もさう云ふ積りで作品に接したのである。

主義主張を標榜した私設の展覧会とは異り官設の展覧会であるから、自分の趣味に偏せず日本の洋画の将来を考へ、幾分奨励と云ふ様な意味をも含み、飽くまで広く採ると云ふ方針で私は鑑別に臨んだ訳である。十何人かの審査員は皆趣味が異つてゐるし、流派と云ふ様な見かたから見ても、新らしいとか古いとか、又何派の系統とか云ふ様に各々立場が違つて居るけれ共誰れも其麼着物を脱ぎ捨てゝ了つて鑑別したのである。

私が今迄鑑別を受ける立場にあつた頃、随分疑ひを抱いて居た。審査員の流派の関係から依估贔屓もあらうし、又自分の知つてゐる人は引き入れると云ふ様な事もあらうと思つて居たのであるが、実際は其麼事は微塵も無く、実に皆の態度は公平であつた。決して作品に対して軽率な処置をとらず、其絵を一人でも良いと認めた場合は再選の方に廻はし、其処で又一人でも認めた場合は、次の日に廻はして鑑別すると云つた風であるから、最後迄残つた所謂入選した作品の価値と云ふものは、公平な見方によつて定められたと云ふ事が出来ると思ふのである。帝展の如き公共的の展覧会の鑑査員の態度としては実に公平であると私は思つてゐる。そして今迄私が審査員に対して、変な疑ひを抱いて居たことを大いに愧ぢたのであつた。

此度の出品の中には裸体画が随分あつたけれども、特に頭に残つてゐる様なものが無かつたのは残念である。裸体の感触にチヤームされて描いたと云ふ様な作品は極めて少く、主として化粧して居るとか湯浴してゐるとか云ふ様な場合を取扱つたものが多い。唯裸体を描けば人目を引くとか、此場合、此人物を裸体にして見やうと云ふ様な考へからの裸体画が多いのである。私は裸体其物の本質に共鳴して描かれるようになる事を希ふのである。

私は水彩画会に関係してゐる処から、人一倍水彩画に良いものがある事を望んでゐたのだが、余り良いのが無かつた。油絵と同時に見ると云ふ関係や、材料の不自由と云ふ点もあらうと思ひ、其処の辺もよく含んで作品に接したのではあるが、何うも緊張味が足り無いと思ふ。さう注文するのも無理かも知れ無いが、一層努力して力ある作品が出て欲しいと思ふ。

最後に私が感じたのは、何うもコンポジシヨン（構成画）が少いと云ふ事である。さう云ふものは余り面白くも無いし又中々労力を要する事で、然も、其れだけの効果が現はれない。云はゞ損な仕事のやうに思はれるが、私は大いに面白い事であらうと思ふ。近頃は、かうしたものは、殆ど流行しない事ではあるし、ある人々に云はせれば下らない事と云ふであらうが、私はこれからの画家にはさうした方面で、大きいものなどを纏める技術を練つて置く必要が大いにあらうと思ふのである。

（『中央美術』6巻11号　1920年11月）

12. 白瀧幾之助「黒田先生の追憶」

私が黒田先生の名前を始めて知つたのは、確か明治二十四年頃だと思ふ。当時私は、山本芳翠先生の生巧館附属画学校に通つてゐたのであるが芳翠先生から黒田先生の噂を度々聞かされたのである。芳翠先生の話に依りますと、黒田先生は若くして法律学研究の目的で渡仏せられてゐたのであるが、大変語学が出来られた処から当時渡欧中の画家藤氏の批評を受ける通訳をよくやられた、そんな工合で自然絵の方に近づかれたさうである。元来先生は天性絵がうまくて幼少の頃狩野派を少しやられたとかいふ事も聞きました、その頃から既に天稟の才は芽生へてゐたさうである。さういふ有様で法学研究の傍ら一寸描かれたものでも素人業ではなかつたので、芳翠先生はしきりに専心絵を勉強するやうに勧められ、黒田先生も遂にその気になり全く斯道に没頭するやうになられたさうである。よく芳翠先生は黒田を画家にしたのは自分であるかの様に私達に話された。「黒田は天才だ、黒田が帰朝したら日本画界に一新紀元を画する、此の生巧館なども黒田に任せる」と。こんな事をかねゞね聞いてゐた私達は其人は無論、作品さへ知らないでゐて可成の興奮を覚えてゐたの

であつた。所が明治二十五年芝公園の弥生館で明治美術会の展覧会があつた時、黒田先生の今回の展覧会に出てゐる、窓際に赤い着物を着てゐる女の読書してゐる「読書」といふ向ふのサロンにも入選した絵が出陳された。当時の日本に於ては実にそれは目新しいものであつて私達は全く驚愕の眼をみはつたのである。

それから明治二十六年先生は久米先生と一緒に帰朝された。かねがね噂丈聞いてゐた先生に初めて会つた私達は非常に感激したのであつた。芳翠先生は早速この両先生に生巧館を開放されて自分は引退され、在来その門下生であつた私達を託されたのである。かういふ所はまた山本先生の偉い所で、永久に私達の感銘に残つてゐる。その折に生巧館は久米先生の厳父久米邦武博士の命名で天真道場と名がかはつた。この両先生に教はつた当時の主だつた門下生で今健在でゐるのが湯浅一郎氏、藤島武二氏、北蓮蔵氏、私、それに曽山塾から来られた岡田三郎助、中澤弘光、矢崎千代二の諸氏、原田塾から来られた和田英作氏、それに小林萬吾氏も来られた。大体さういつた顔振れであつてこの天真道場は非常な繁昌を来した。

この両先生帰朝までの日本に於ける洋画の教へ方は、極めて手ぬるいやり方で、今も稀には店頭などで見受けるあの擦筆画であつた。一枚描くにも丁度写真の修整でもするやうな丁寧さで描いたやうな次第で、中々時間のかゝる無駄ばかりやつてゐたのである。そのときにこの両先生が帰朝されて、こんなやり方では手間ばかりとつて少しも本当の絵は出来ないとて、早速仏蘭西から木炭用紙を取り寄せ初めて木炭画を教へて下さつたのである。それから何れの塾も、すぐさまその影響を受けて木炭画に変り洋画界は非常な革命と進歩を来したのである。それに両先生は生きた裸体を手本として描かなければ駄目だとその必要の急を説かれた。所がそんな事は当時まだ言ふべくして容易に行はれない時代であつて、そのモデルが中々得られなかつた。そこで俄に協議して、場末の立ン坊に交渉したり、或る所の唖の娘に相談したりといつた有様、私などは門下の末輩であつたのでその交渉委員に使命され東奔西走、種々滑稽を演じたものであつた。まあ兎に角そんな工合でなんとかしてモデルも使ふやうになり、この両先生の御帰朝に依つて先づ素描が格段と進歩した。かくして画道の根柢であるべきデツサンの意義を教示された事は吾画界にとつて偉大の功績と云はなければならない。

それから日清戦争が起つて仏国新聞の挿画の依嘱を兼ねて黒田先生は従軍されることになつた。その時のスケツチで中々面白いものが陳列されてゐるやうである。

明治二十八年には京都に第四回博覧会があつて、その審査員に両先生がなられた。その時出品されたのが、あの「朝粧」といふ作品で中々問題を惹き起したものだつた。それが日本に於て公開された裸体画の始めであつた。此画はあちらの新サロンにも出たものであつて、当時の会頭ジヤヴアンヌが推賞したといふ話である。その色彩の工合は先生の師、コラン先生の外光派の感化がよく見受けられる。熊の毛皮をブラツクを用ひずにブリユーと紅を基調として描いてある、之は光線の色を研究した結果で今日では少しも不思議に思はぬが其当時は仏国でさへも或る新聞では日本人には熊の毛色が青く見えるだらうか、と揶揄した評も出たとか先生は笑つて話された事がある。「厨婦」といふのはあれで旧サロンに落選したものださうだが、今みるとあんないゝものが通過しない程当時のサロンは厳格なものであつたらしい。それに比べると今日のサロンは非常に堕落してゐるやうである。

明治二十九年には美術学校に洋画科が新設されて黒田、久米両先生がその教授になられた。

此頃迄洋画の団体には明治美術会といふのが一つであつたが、何れの会にも起る事で新旧思想の衝突など兎角議論が一致しない処から、ある偶然な機会に故山本、黒田、久米、藤島、岡田、故安藤といふ人達が図らずも会合する事になつた。その会合は極めて平民的なもので、有名な芝、聖坂の濁酒屋の暖簾内の腰掛で行はれたもので、そのときの話で更に新団体を作らうといふ運びになり

茲にその居酒屋に因んで白馬会といふものが生れた。であるからその第一回展覧会は会場にあの濁酒屋に縁ある縄暖簾を張るといふ風で中々面白いものであつた。その時の絵も大部分此度陳列されてゐる。第二回白馬会の代表作があの有名な「知、感、情」といふ三大裸体で、当時まだ滑稽な程警察の干渉が酷しかつたが破天荒の敬意を表する意味で腰から下覆ひをして公開されたといふ話はまだ我々の記憶に新たなものである。当時明治二十八－九年の頃は先生の滞京都時代で、あの畢生の大作「小督の昔語」はその間約二年間の歳月を費して辛酸研究の結果完成されたものである。それは此度展覧の数多の画稿をみても解る通りである。それから逗子、大磯附近にも滞在されて色々な作をなされた、その頃が一番勉強された時代だと思ふ。日本で一番最初に描かれた肖像画はあの東久世伯のもので、私どもはどういふ風に描かれるだらうかと思つて非常な興味を持つてゐた所、あゝいふ風な光線の色で描かれたものだから実に驚いたものであつた。

元来先生を印象派画家といふやうだけれども実は非常に穏健な外光派で作品もそれに属するものが多く、勿論印象派のものも二三点はあるがそれは印象派といふものはこんなものであると私達に教示下さるために描かれた位のものだつたと思ふ。その派の作品は却つて久米先生の作に多いやうである。

白馬会が解散されたのは何時頃だつたかよく覚えてゐないが、まあ兎に角大変盛んなものであつてよく終りを完うした事は事実である。私は明治三十八年から七年ばかりは外遊中でその間の事はよく知らないが、帰朝してみたら文展の第六回目位であつた。

その頃からの先生は次第に政治の方に奔走されるやうになり、最近までの事は世間の人がよく知つてゐる事であり茲に言ふ必要はなからう。その間は一寸実際的には絵と遠ざかつてゐられた形であつたが日本の美術界が先生に負ふ所は多大なものであつた。これからはまた大いに画界のためにお尽し下さるお考へであつたけれども不幸病気のためにこんなに早く逝去された事は私達にとつても実に残念至極な事であつた。

もともと先生はあんな仏蘭西のやうな国に永らくゐられたにも拘らず浮華軽佻を非常にきらはれ、日本国体の尊厳に崇敬の念を持たれる事多大であつた。資性極めて謹厳な性で、私達門下生に対しても自分のコラン先生に於けると同様日本古来の恩威並びある暖かい師弟の情を持つてゐて下さつた。それに特に細心周到な所があられて一枚一点の素描さへ疎にはされなかつたやうで、此度の展覧会をみてもそのことは略々解ると思ふ。

此度の展覧会は無論追悼の意を表するためであるけれども一は先生の芸術に対する真摯な態度が後進を裨益する所多からんことを期してゐるのである。

（『中央美術』第10巻第12号　1924年12月）

※師の黒田清輝逝去に際しての白瀧の文章。白瀧は中澤弘光とともに黒田のデスマスクをスケッチしたという。

13. 白瀧幾之助「大黒帽時代の湯浅君」

それは、約四十年ほども昔の話である。

僕が山本芳翠先生の生巧館附属絵画研究所へ入つた時にはもう、湯浅君は僕等よりも先輩だつた。研究の順序は、最初は解剖図の臨摸、次ぎには彫刻の写生、それを卒へてモデルといふ順序であつたが、湯浅君は既にモデルを描いてゐたと臆へてゐる。

○

今でこそモデルに不自由はないが、その頃、モデルを得ることは中々容易ではなかつた。僕らは随分その為めに苦心したもので、ある時は、芳翠先生の処へ出入りする左官屋の娘に頼んで、その

又友達の娘さんに無理から来て貰ふといふ風だつた。それも顔を描くだけで、裸になるものなどは殆ど無かつた。

其処へ黒田清輝先生が外国から帰つて来られて、山本先生の塾を引受けられ天真道場と改称すると共に、盛んに新智識を注入されたものである。そして、「顔ばかり描いてゐては進歩しない、裸を描かなければ駄目だ」と云ふ持論だつたので、僕等は毎日のやうにモデル探しに出かけたものである。その頃、土橋の附近に立ン坊が沢山ゐたので、それを頼んで引張つてくるのだつたが、それも初めは顔、次ぎは半身、二三週間してからやうやく全身といふ風に口説き落すのである。男のモデルは先づそれでいゝが、女になると実に困つた。或る時、何処からどういふ手順で連れて来たのか、唖の娘がモデルに雇はれることになつたが、これが中々の美人で、それが仕舞ひには裸にまでなつて呉れたのであるから、僕等は全く有りがたかつた。それを聞いた他の塾の連中が盛んに羨望したものである。

モデル口説落しは中々の大事業だつたが、先輩は威張つてゐて行つて呉れぬ。僕等はよく二人連れ位で土橋あたりへ出かけたものである。湯浅君などもその仲間だつたと思ふと、今昔の感に耐へぬものがある。

○

その頃の僕等の写真を見ると、ビロードで拵へた大黒帽を得意然と被つてゐる。これは黒田先生などが帰朝された時に、フランスから持つて来られたお土産で、向ふでは羊飼ひなどが被つてゐるベレーといふ帽子ださうで、それを真似て山本先生がわざわざ作らしたのだつた。

○

湯浅君は僕より五つ年上だつたと思ふ。その第一印象は、物数を云はぬ人、こわいと思ふやうな人で、冗談などは云つたことのない真面目一方の人のやうに考へられたが、だんだん交際つて見ると、さうばかりでなく、中々愉快な人であることが分かつた。

天真道場時代に、故岩村先生にすゝめられて、僕等の仲間に義太夫の稽古をする者が出来たが、湯浅君などもその一人で、今でもきつと太閤記のサワリ位は語られるであらうと思ふ。

○

その頃の洋画といふものは、全く社会から異端視せられたもので、僕なども東京へ出て洋画を習ふといふことに就いては、盛んに親兄弟の反対に遭つた。日本画なら兎に角、洋画など習ふ者は、全くの道楽者で仕方がないやうに思はれたものである。そんな時代だから、洋画の材料など、今の人が思ふと嘘としか思はれない位不自由なもので、東京で油絵具を取扱つてゐる店は京橋の三十軒堀に伊藤といふ絵具店があつたのと、銀座に一軒ある位のものだつたと臆へてゐる。それも種類が少ないのと、高価なのとで、僕等貧書生の平には中々入り難かつた。で、ペンキを使つたり、画布代用としてはトタン板などを使つたりしたこともある。湯浅君などもかういふ困難な道を歩かれて来た仲間の一人であることを思ひ、その健康な姿に接し得るのは嬉しい。

（『中央美術』13巻10号　1927年10月）

※湯浅一郎については15も参照のこと。

14. 白瀧幾之助「洋式舞台装置の最初」

日本の芝居に洋式の舞台装置が応用され始めたのは明治三十二三年頃活人画といふものが行はれた頃からであらうと思ふ。その活人画が始めて演ぜられたのは、下田歌子さんの実践女学校が出来るについて、その基本金を作るといふ事から、その時分に下田さんが華族女学校の校長をしてゐた関係で、女史の薫陶をうけた人達の発起で後援会のやうなものが組織され、そこで活人画といふも

のが始めて行はれることゝなつた。その会の幹事としては伊修院大将夫人、加納治五郎氏夫人長田秋濤氏夫人などが主として働かれたと思ふ。

これはその以前に、下田さんから山本芳翠先生に相談があつて、何か変つた催をしたいといふ事だつたので、芳翠先生の考案で活人画をやることになつたのである。さういふ訳けで其頃山本先生の画塾生巧館で学んでゐた我々もその仕事を手伝ふことになり、湯浅一郎君北蓮蔵君、私などが背景は勿論舞台装置をやることになり、随分熱心に描いたものである。その時の活人画は十二幕で、下田さんがお手のものゝ日本歴史の中から孝女節婦の一節を十二場面選定したもので、たとへば山内一豊の妻、正行の母、春日の局、平政子、秋色などいふ人物を捉らへて各絵画的の場面を仕組んだもので、一幕の時間は僅かに十分位で終るのであるから労力に比較するともつたいないやうである。各人物の主人公には華族女学校の生徒が扮装することになつたが初めのうちはみな逡巡して中々進んでやらうといふものがない。処が山本先生が舞台の雛型を作つて、オペラ式に幕を絞つたのを描いたり、細い臘燭を短くして豆電気代りに入れたりして見せたので、こんな綺麗なものなら・・・とお嬢さん方も急に乗気になつたものである。しかし、いよいよ水交社で公演するだんになると、家族の方から小言が出て、曰く『華族の令嬢が公衆の面前で役者風情の真似事をするのは体面にかゝわる』といふのである。さうかと思ふと、中には『さういふことを云つてゐるから華族は時勢に後れるのだ大いにやるべし』といふ賛成論も出ると云ふ鹽梅だつたが、兎に角、前記三夫人などの熱心な努力によつて水交社の舞台へ乗り出すことになり、湯浅、北、私の三人で背景を描くことになつた。処が、我々は今まで泥絵具を使つたことがないので困つてゐると、山本先生は巴里で芝居にも入つてやつて来られた経験を持つて居られたので、万端先生の指揮に従つてやることになつたが、実際の仕事になると中々うまく行かないので、その頃浅草で写真館をやつてゐた下岡蓮杖氏の息子さんが、写真のバツクを描き馴れてゐるのでその人に来てもらつていろいろ手伝つてもらつた。何しろ三間五間といふ大きいものを描かなければならないので、場所に困つた、芝の工場か何かを借りて描いたやうに記臆してゐる。下岡氏の他に和田三造君なども来て手伝つてくれたと思ふ。

山本先生の指導によつて描き上げたバツクの絵は出来上りを見ると、誠にうすぎたない。こんなものを公衆の面前にさらすのかと思つて、我々が内心タヂタヂしてゐると、山本先生は笑つて、「これでいゝ、舞台に持つてゆくとビツクリする程綺麗に見えるから」と云ふ、実際舞台に飾つたのを見ると、我れながら見違へるやうに美しく見える。ある武士の妻が、夫に代つて陣営を見廻る場面になると、お城をバツクにして薙刀を持つて立つ婦人を中心にして電気仕掛けの月が徐々にのぼるといつた具合であつたが、この電燈の月なども全くこれが始めての試みであつたらう。洋式の背景と云ひ、すべての点に新し味が溢れてゐるといふので、一円と三円の二種の切符で見せたのだが、公演二日間とも大入満員の盛況だつた。内親王お三方の御覧にも入れるし、遂には卒倒者を出すといふやうな騒ぎで、赤十字社から看護婦を出張して貰つた位である。

これで大当りの味を占めたので、今度はほんとうの意味の公演をやらうといふので歌舞伎座の舞台へ乗り出すことになり、一流の俳優を我々の描いたバツクの前に立たせることになつた。俳優は今の中車、六代目、女寅などが出演した。中車は正行の母に扮装したと思ふ。私などが名優を捉らへてあゝこうと振りつけをするのだから今から思ふと些か滑稽な気がする。

しかし、歌舞伎座の公演は、華族女学校の時とは大いに予想が違つて大失敗だつた。宣伝もまづかつたが、元々動きのない活人画を本物の俳優にやらせることも間違ついてゐるし、歌舞伎座のやうな大舞台にかける性質のものではなかつたのである。

しかし、それが影響して明治三十六年になると、柴田環さんなどがオペラをやりたいから私達に背景を描いてくれと云ふた談があつた。渡邊さんといふ人の卒業祝ひの催しとして、日本で始めて

のオペラをやりたい、資金は僅か千円だけだから、それでもつて万端の入費に当てるといふわけだつた。恰度岡田三郎助君なども帰朝したばかりの時だつたから、同君などにも相談したやうに思ふが、実際の仕事は私達が主にやつた。オペラのオルフオイスを描いた。入場は無料であつたが、日本で最初のオペラ試演であるといふので、大した人気を博したものである。
（『中央美術』14巻7号　1928年6月）

15. 白瀧幾之助「亡友湯浅」

先輩一郎君は明治元年上州安中町素封家湯浅治郎氏の長子として生れ、弟妹十二人もある豊な家庭に人となつた。

子供の時から絵がすきであつたさうで、京都同志社を卒業した後出京して山本芳翠先生の門に入つたのである。

初めは至つて無口で、無愛想で一寸近附き難い人であつたが奥様を迎へてから急に愛想よくなつて、朝夕寒暑の挨拶も口から出るやうになつた。同窓の丹羽君のお母様がこんな事ならもつと早く奥様を貰つてあげたらよかつたと、からかはれた事があつた位である。遂には何等飾り気のない一種なんともいへぬ親しみある好々爺となつた。そんな訳で至つて楽天家であつて、美術家に通有性の時間の観念等は更になかつた。それに就いてかういう咄がある。

山本先生は三越の為美人画の絵看板を描かれた。それは恐らく油絵の広告画のはじめであつたであらう。頗る評判が良つたので白木屋が早速向ふを張つて、五大都市の停車場に掲げるべく五枚の美人画を注文に来た。吾々が夫をかく事になつたが、湯浅は多分期日通りに描かないだらうからといふので除外された。それから僕は湯浅の為に大に弁解して遂に描く事にはなつたが、此点では先生迄夫程不信任であつた。然しながら気の向いた仕事だとどんな大きな物でも一人でやつつけてしまふ。

下田女史の実践女学校創立基金募集の為に、山本先生の創意に依つて活人画が催された。之は日本に於ける最初のものである。

其背景をやはり吾々が描いたのであるが、其中の苗字を失念したが、助左衛門の妻の場面は湯浅独りでやつて仕舞つた。三間に五間もある大きな物であつたが、大変よく出来て評判がよかつた。

今日の芝居の背景に洋画をとりいれて居るのは、此活人画からはじまつたのである。

また何事に就いても一議論ある人で、それにしばしば悩まされた。つまり人と変つた事をしやうといふ傾向があつた。

たとへば蒐集物でも櫛とか履物とかいつた様な余り人のしない物を集めたり、又洋行するにしても其時代は猫も杓子も洋行といへばフランスを目標にしたものであるのに、独り湯浅君はスペインに上つて、あの通りヴエラスケスを研究した。今日グレコやヴエラスケスを云々する人は珍らしくないが、其頃スペイン派を研究するといふ事はさすがに湯浅の偉い所であつた。

又筆技の練達強健なる事に至つては、既に白馬会創立以来今日迄の各展覧会に発表されてゐる通りで、彼のヴエラスケスの大作数葉の模写を苦もなくやつてのけた。腕前は実に驚嘆に値する。尚君は油絵のみならず水彩画家としても立派な画人であつた。

いづれにしても腹の底から知り合つた友達を亡つたといふことは、此上もない寂しさである。
（『アトリエ』8巻4号　1931年4月）

16. 作家言

平凡を愛す
酒は灘　鳥は鶯　花はばら

三味は太棹
　島田丸まげ

白瀧幾之助
（『美術新論』第7巻第12号　1932年12月）

※『美術新論』のシリーズ掲載「作家言」の白瀧の回。白瀧の写真つきで掲載された。

17. 白瀧幾之助「青山君と私」

青山君の生家は、兵庫県生野で、経師屋を生業とし、傍ら菓子を商ふてゐた。その家の五人兄弟の末子として生れた。

然し、何分にも彼の志を全ふさせる程の余裕もなかつたのであつたが、青山君の鬱勃とした志は枉げられなかつた。和田三造氏や、私などが画家を志して上京したことなどが、一層青山君にその気持を唆つたのか知れない。家の売溜を窃ねて上京の費用を貯えてゐたのを、兄さんに見付けられて叱られたと云ふ話もある。

その後遂々上京して、私の下宿を訪れたことがあつた。私はその時懇々と画家でたつことの困難を説いたが青山君の意志を翻すことが出来なかつた。古い話でもう記憶もはつきりしないが、その時青山君は日本画家にならうか洋画家にならうかと聞いたさうだが、私は洋画家になることを勧めたと、その後青山君が話すのを聞いて、そんなことを云つたのかと、今更思つたこともあつた。

この頃高木背水氏の処に厄介になつてゐた。私が高木氏と同船で渡米し、丁度帰朝する頃、青山君があちらへ行つてしまつたので行き違ひになり、その間の事情についてはそんな訳で私はよく知らないが、額縁商の長尾に種々世話になり、面倒をかけてゐたのだ。

青山君の処女作としては「坑夫」がある。兵役検査の為始めて郷里生野に帰省し、老坑夫を描いて天才のひらめきを見せた。

その後明治大正名作展に出た「アイヌ」がある。これなどはルクセンブルグの美術館などにあるものと比較しても、あまり遜色がない出来栄えだと思ふ。

それから「ホアンチウ」と云つて支那の博徒を描いたものがある。これによりて文展二等賞を獲得した。又「金仏」「九十九里」等の労働者を主題としたものを描いた。近頃プロレタリア芸術等をやかましくいふけれど、青山君は数年も前にさういふものを取り扱つてゐる。

渡仏の前に九州に歴遊してゐた彼は、九州大学の西川博士と知遇を得て、当時赤貧であつた彼が、あちらの絵画のコツピーを国へ送つて費用にすると云ふことで渡仏することになつた。ロシヤの絵画に興味を持つて印度洋経由をしないで、シベリヤを通つて行つたと記憶する。その頃あの欧州大戦が勃発してミユーゼアムは閉鎖される様な事情になり、コツピーも出来ず、相当苦しい生活が続けられたと聞いてゐる。当時彼の困苦を見兼ねて、リオンの公使などもよく帰国を勧めたし、その当時渡仏してゐた数氏もすゝめたが聞かなかつた。思ふに画業の完成に達しないうちは帰らないと堅く心に契ふ処もあつたのであらうと察せられる。よく青山君の気質を飲み込んでゐる長尾が、最後に金を工面して「帰る気があるなら帰つたらどうか」と無理に強ひないで金を渡したのがうまくいつて、帰国することになつた。斯うして、十年程あちらにゐたと思ふ。

帰国の後三年ほどは、大森馬込に、斯うと云ふ製作も発表もせずに過ぎたが、その後大森の山口銀行の井田氏の肝入りで、同じ銀行の西脇氏に援助を得て、あの帝国美術院賞をあたへられた「高原」作が生れることとなつた。あの作は、今三井家の所蔵する処となつてゐる。

その後京都の画商三角堂の主人（薄田氏先代）の肖像を描くこととなり、これが機縁となつて、

大阪の富豪櫟原氏と知ることとなり櫟原氏の父君を描くこととなつた。青山君のあゝ云ふ気質が、気に入られたと見えて大いに意気投合したと云はれる。斯うして櫟原氏の青山君に対する後援は、単に金銭のみの援助に止らず、氏は大阪に於て千万長者であるにもかゝはらず、上京の折には、旅館等に泊らずに、あの青山君のアトリエに起臥し、青山君と寝食を共にして、心から彼を尊敬し愛して、青山君の生活の安定をはかり、よく青山君をして、絵画に精進せしめた。

又、青山君の死去の節には、郷里には人を走らし、氏自身遺骨と共に親子で上京し、葬儀費用万端を提供せられた。実に画界に於ける美挙といふべきであらう。

尚「高原」につゞいて「牛」「朝」と傑作が次ぎ次ぎに世に出ることになつた。

最近三ヶ年間は西川博士の紹介で九州大学の会議室の壁画に着手し九分通りまで出来上つてゐたが、遂に完成を見ずに他界した。

彼はシヤヴァンヌを慕ふて、彼の画にはシヤヴアンヌの影響が現れてゐるが、もう十年生存したならば、本当の青山が絵に滲み出るまでになつたことと思ふと、今更に彼の逝去が惜しまれてならない。然しそれだからと云つて、彼の豪放な感じと云ふものは、決して、そこはれるものでなく、天才と云はれる人も多いが、天才中の天才であつたと思ふ。絵に対する不断の精進を続けてゐたことは、敬意を捧げるに価ひするものだと思ふ。（談）

（『アトリエ』第10巻第2号　1933年2月）

※同郷の後輩青山熊治逝去に際しての文章。白瀧は石川寅治ら数名と発起して青山熊治遺作展開催に尽力した。

18. 矢来駒吉「白瀧幾之助氏と小鳥」

田園調布は一足先に春が訪れたか、暖い陽ざしが、文化住宅の赤い屋根や芝生に輝いてゐる。小鳥の話を聞くにはうつてつけの小春日よりだ。丁度白瀧さんも春の光にアトリエの中にもゐられなくなつたのか、庭に出て鳥籠の掃除に忙がしいところだつた。切出すまでもない、自然と鳥の話に落ちるわけだ。カメラを向けると、「鳥屋のおやぢを撮つてなにをなされる」と新しい籠に移された懸巣に水浴させ乍ら云ふ。庭の隅の台の上に、蓋の開いた鳥籠が据付けてある。これは囮りを側に置くと、鶯でもなんでも近寄つてきて、中にぶら下つてゐる、袋虫或は海老づる虫を食ひに入り、中の桟が外れてぱたんといつた仕掛けになつてゐる。「昔の人はうまいことを考へる。これなどは、裏の清水さん（良雄氏のこと）がおもしろいと云つて、一生懸命で写生をして居つた」それは生木を曲げて弓弦の如く張り、それをバネに利用してそれに網を逆に押さえて地面に据へ、木をカムフラージユして置くと、地上の餌を漁る小鳥ならば大抵のものは引つかゝるさうである。簡単な装置で小鳥をいためずこんなうまいものは無い、と農民美術のやうな罠も用意してある。白瀧さんの鳥差の写真などもお目にかけたいのであるが、それではどつちが本職だかわからなくなつてもいけまい。

いま飼つてゐられる小鳥の種類は、白頭鳥（一名ぺたこ台湾産）青黄鳥（アフリカ産）鶯、あかひげ、あおし、目白、四十雀、懸巣、くろ鶫、きぼうし（鸚鵡の一種）かなりや、このはがへし、白腹頬白等である。小鳥を飼ふのには、別に苦心といふことはないが、天然の鳥を餌づけするのは一番難しいさうである。普通の籠に入れては啄を痛めてしまふので、三方磨硝子（一方は板）の箱に入れて慣らしてゆくのである。今はゐないが溝鷦鷯などは劫々餌づけに慣れないので困るとのことである。

日本の小鳥の色は薄暗いから、小鳥を油絵の題材にするのは、実に無難しい。日本画のやうに白いところへ描くのではなく、実在の場所を明示しなければならぬから木の枝に止つてゐるところに

しても、明る過ぎる場所では、かんじんの鳥がたゞくろく見えるだけでどうにもならぬし、森林の中や込んだ枝の重なつてゐる場所では、小さい小鳥はどこにゐるやら判らぬことになつてこれにはまことに苦心をするといふ次第である。

　鶯の鳴声は三段の変化がなければならぬもので、先き上りとか中上りとか尻上りといつた調子の変化である。他の小鳥は、野性の方が遙かに味はひがあるが、鶯だけはどうも野性の声は淋しい。やつぱり、若子からつけこしなければいけない。鶯だけは例外のやうである。然し小鳥屋の鶯は、目白だとかかなりやの声が混合してよくない。また雲雀は凝る人は農家に預けたりする位で、声を聞くのを楽しむには、これまた苦労が増えるわけだ。兎に角白瀧さんの小鳥は趣味には違ひないが趣味と云つては余りに専門的である。

（『アトリエ』第15巻第3号　1938年3月）

※旧かなづかい、旧字は適宜新かなづかい、新字にあらためた。

（ひらせ　れいた　当館学芸員）

『大日本魚類画集』の「解説」の再録

田島　奈都子

序

本編は大野麥風（1888～1976年）の代表作である版画集『大日本魚類画集』（以下『画集』）に付録としてつけられていた「解説書」の第１輯を再録したものである。

ここで簡単に大野麥風、そして『画集』について解説すると、麥風は1888年東京に生まれ、本名を要蔵という。当初は洋画家を志し、長原孝太郎（止水）に学び、1909年の第３回文部省美術展覧会に「白き船」を出品、以降白馬会、太平洋画会、光風会等の洋画団体に出品した。しかし、1910年代後半には洋画から日本画に転向し、1919年第1回帝展日本画部で入選。1923年９月に起った関東大震災を期に淡路島に、その２年後には西宮市に転居し、没するまでの間、日本画家として同地で活動すると共に、地元の美術界の振興にも尽力した。

一方、『画集』は1920年代末に品川清臣によって創業された西宮書院から1937年８月～1944年７月にわたって、各回12点、６期に分けて継続的に出版された全72点の木版画集であり、麥風はその原画制作者となる。元来、魚類に対する感心が高かった麥風は、この企画のために水族館に通うだけでなく、和歌浦沖合で潜水艇に乗り込み、そこで見られる魚の生態を観察したと言われている。彫師は藤川象斎、摺師は当初祢宣田萬年であったが、後に光本丞甫が摺師主任として登場し、その他、今井柳月、中村匠谷、安田青桜等、力のある職人が総動員された。そのうえ、『画集』の発行に際しては、監修を洋画家の和田三造が、題字を谷崎潤一郎と徳富蘇峰がそれぞれ担当し、他にも正木直彦、岡田弥一郎、結城素明、小杉放庵、石井柏亭、小川芋銭、村上華岳、林重義、西村新が賛助員として名前を連ねている。つまり、『画集』は当代きっての最高峰の人材によって世に出された作品集だったのである。

作品の頒布方法は基本的に会員制度を採用し、1ヶ月３円、1年先払いの場合は35円を入金すると、毎月意匠を凝らした紙挟みに入れられた作品が１点ずつ配布され、特製額縁の贈呈等の特典もついていた。「本邦最初の魚類生態画」「原色木版二百度手摺り」のキャッチコピーがつけられた500部限定の『画集』は、文字通り、好事家の興味や関心をくすぐる仕掛けが満載であり、現在でも高い人気を誇っている。

ところで、『画集』の頒布に当たってはＢ５判、通常８ページの「解説」が付録としてつけられ、その執筆に当たったのは田中茂穂と上田尚の２人であった。

高知県生まれの田中茂穂（1878～1974年）は、わが国を代表する魚類学者の一人であり、1913年にスタンフォード大学のジョーダンとスナイダー両博士と共著した『日本産魚類目録（英文）』は日本産の魚類を初めて系統的に分類した名著として知られている。生涯に著した研究論文は300編、著作は50冊に及び、約90種の新種を発見したほか、昭和天皇ご採取の魚類標本の同定にも携わった大学者であり、『画集』が刊行されたとき、上田は母校の東京帝国大学理学部教授兼同大学三崎臨海実験所長であった。

一方、福井県生まれの上田尚（1881～1943年）は、小学校教員や病院長秘書、新聞社勤務等を経て、1920年前後から釣り研究家として活動し始めた異色の人物である。明治末には神戸に移ったらしく、以降は同地を拠点に執筆活動に専念し、『サンデー毎日』に連載した釣りの記事は、1923年に『釣の話』として単行本化され、その他『釣り方図解叢書』全８巻（文化生活研究会、1925～27年）、『釣魚大全』全12巻（洋々社、1928～30年）等も著し、その著作は20種に及ぶ。また、1927年には大阪の阪急百貨店の釣り具部顧問に就任し、釣りに関するコンサルティング業務も行っていたようで、今日的に見れば、釣りに関するマルチタレント的存在であった。

残念ながら、どのような経緯でこの２人が『画集』の解説を執筆するようになったかは不明である。しかし、麥風が生来の魚好きであったことを考えると、当代一の魚類学者や住まいも近い釣り

研究家と何かの機会に知遇を得ていたとしても不思議ではなく、本邦初の魚類に特化した精巧な木版画集の企画に対し、彼らが喜んで参画したことも容易に察せられる。そして、名実ともに当時最も優れた魚類学者と、雑誌連載や釣りに関するハウ・ツー本の執筆を通して一般にも名の知られた釣り研究家の両名が、それぞれの見地から毎回画題となった魚について平易に説いた「解説」の存在によって、『画集』は芸術作品としてのみならず、学術的にも貴重な資料となり、また魚を愛する市井の人々にとっては、見て読んで楽しめる逸品として人気を博した。そしてだからこそ、『画集』は戦禍が年々厳しくなる中においても、1944年の６輯まで全72点が発行され続けたのである。

なお、田中の文章は版画愛好家に外国人が多いことを考慮し、途中までは軽井沢教会の宣教師グレン・ショウによる英訳もつけられていた。ただし、戦時体制の強化により敵性外国語の使用が禁止され、外国人の在留が難しくなってきたことを理由にショウが帰国したことから、英訳の掲載は1941年８月発行の第４輯ノ12「ウナギ」が最後となっている。また、上田も1943年に亡くなったことから、1944年３月発行の第６輯ノ９「ヒラメ」を最後に、以降の「解説」は田中一人によって執筆されている。

現在、当館では『画集』全72点については全て所蔵しているものの、その付録である「解説」については全体の３分の１程度しか現物を所蔵しておらず、各所蔵先のご協力のもと、コピーをとらせて頂いたものを含めても、全点が揃わない状況にある。今回は全点が揃った第１輯について再録し、今後も揃った段階での再録を考えている。『画集』も刊行から70年近くが過ぎ、中身の版画と「解説」が別れてしまい、それぞれが一人歩きしている場合が多いようである。どちらかで「解説」を見かけられた方は、今後の調査研究のためにも、是非ともご一報頂きたい。

※『大日本魚類画集』の「解説」の原本は、B5判、右とじ、通常８ページであるが、今回の再録にあたってはページの順番を優先しており、実際の見た目とは異なっていることをご了承ください。

＜参考文献＞

『高知県人名辞典　新版』高知新聞社　1999年
丸山信『釣本の周辺』　白川書院　1976年
永田一脩『江戸時代からの釣り』　新日本出版社　1987年
上田尚『釣の研究』　警醒社書店　1921年

＜謝辞＞

『大日本魚類画集』の「解説」の再録にあたって、下記の機関及び個人にご協力を賜りました。
ありがとうございました。

九州大学附属図書館
東京海洋大学附属図書館
田部雅昭氏